広島大学教育学部紀要　第2部　第41号　1992

# 引用話法についての会話方言学的研究

江　端　義　夫
(1992年9月30日受理)

A Discourse-Dialectological Study on the Quote Speech

Yoshio Ebata

In this paper we try to consider the discourse implied the quote speech. This paper will take material in the Minamikasuya dialect society in Aichi prefecture of Japan. Results of this research are as follows.

On the sentence stage

(1) The " ～tete" form of the quote speech means a quotation speech and the " ～soite" means the explaining speech.

(2) The first person of the grammer mostly does not appear before the " ～soite" .

(3) At the most of the cases they are easily situated at the end of the sentences as the marker of the quote ending.

(4) Other expressions without those are as follows.

～teyuu, ～teya, ～te, ～sote, ～so,

On the discourse stage

(5) Next 4 distinctive features are remarkable on the " ～tete" form of the quote speech.

○the first departure in character　○on restriction　○holding theme in common　○natural reception.

Next 4 remarkable characters also are seen on the " ～soite" form of the quote speech.

○particular, emphasise, positiveness　○humble oneself, uprightness　○unexpected, excitement　○cross-examination, confirmation of the fact, paying attention.

## はじめに

たとえば，「皆さんに宜しくお伝えくださいと言っておられました。」などと伝言するときに，相手の発話を「～と言って」で承けて，聞き手に伝えることがある。英語では一般に，これは話法として，直接話法や間接話法の観点で，文法上の重要な問題とされている。しかし日本語の場合には，接続助詞の「ト抜け」現象ぐらいが問題とされた程度で，まだ十分な研究がなされていないようである。もっとも，少し前，三上章氏1972の卓見に端を発して，引用話法についても試論が見られるようになってきた。最近，雑誌『日本語学』(1988, 7－9）に引用論の特集が編まれたり，中田智子氏1991bによって，引用話法の特徴記述の方法が，提案されたりした。引用話法は，コミュニケーション上での機能が整頓されなければならない未開拓な現象であると同時に，今日的な研究課題なのである。

さて，今日までの引用話法の研究の現状を見ると，欧米語との対照を中心とした共通日本語の研究ばかりであり，日本語方言での引用話法の討究は，これからという状況である。

そこで私は，一地方言の引用話法に見られる特定言語形式をとり上げ，会話次元における言語運用の社交的ルールを研究してみることにした。本稿での実践を，会話方言学の実践と考えている。また，筆者は，方言の修辞力に視点を置く修辞方言学の立場から見て，以下の実践を，修辞方言学の一例と見なしても良いと考えている。

## 一．問題の設定

人の発言を引用して相手に伝えるときに，愛知県知多市南粕谷の方言では，次のような二種類の言語形式が見られる。

a○エー　ガヤ。マー　イコ　カヤテテ　ダーット　ハシルダ　ワ。いいじゃないか。もう行こうよと言って，ダーット走るのだよ。（中男→老男）1965

b○マー　アシタ　ベントー　モッテクダソイテ　ノー。もう明日は，弁当を持っていくんだと言ってねえ。（老男→青男）1965

上のa，bの文例中で，波線を引いた所に注目したい。一人の話者の発言中で，無意識的にa, bが使用され，区別を問われても，正確には識別できにくいものである。しかし，発話を熟視すると，以下のように，

a「～テテ」ー引用発話を醸成する
b「～ソイテ」ー解説発話を醸成する

と整理できるようである。

文中における場合と会話における場合とを段階的に論じ，aとbが言語運用上の社交的ルールを，どのように内在させているかについて，考察してゆきたい。

## 二．承前形式についての検討

〈「～テテ」引用発話〉

以下，「～テテ」の前部形式の表現における全体的意味を〈　〉で表して，文例を掲げる。

〈禁止〉

1○イクナテテ　イットルノニ　ワカラン　カ。行くなと言っているのに，分からぬか。（中男→少男）1980

〈命令〉

2○カッテ　クダレテテ　ソー　ユーダ　ガイ。買って下されと，そう言うんだよ。（老男→青男）□（注）以下，日付けのない文例は，1965年の資料である。

〈疑問〉

3○ショーガツマデニ　ハイ　ヤッテ　クレル　カエテテ　ソイタダ。正月までにもう，やってくれるかねと尋ねたんだ。（老男→老男）

〈断定〉

4○イラン　ヨッテテ　ユート　ソンダ　ゾヨ。要らないよと言うと損だよ。（老男→青男）

〈推量〉

5○コノクライデ　デキルダラーズテテ。このくらいで，できるだろうって。

〈説明〉

6○フーフデモ　フタリデ　ショクジオ　シタ　コタナカッタテテ。夫婦でも，二人で食事をしたことはなかったって。

以上の1～6の文例では，「～テテ」が承前形式の内容に制約を加えていない。1～3は相手に要求する表現であり，4～6は相手に要求しない叙述の表現である。文種の差によって，「～テテ」が拘束を受けているとは，まずは，言えないようである。ただし，一つ注目したいのは，文例1と3の「～テテ」の先行文の発話者が，引用者自身であるという点である。「～テテ」で，自分の発話を引用することができるということである。勿論，2，3人称の発言を引用することは当然でもあろう。

次に，「～ソイテ」について考える。

〈「～ソイテ」解説発話〉

〈命令〉

7○ハヨ　イカンナラン。チャト　イケ　チャト　イケソイテ。早く行かなければならない。すぐ行け，すぐ行け，と言って。（初老女→中女）

〈断定〉

8○ドー　ヤッテ　ヤットルシャンケド　アメニ　アウト　イカンソイテ。どうやって，やっているか知らないけれど，雨にぬれるといけないと言って。（中女→中女）

〈感動〉

9○ヨー　ソーニ　スワットル　ノソイテ　ナン。よくもまあ，そんなに（根気よく）座っていることだねといってね。（初老女→中女）

〈説明〉

10○モノスゴイ　コト　タイノーシトルソイテ　ナー。ものすごく税金を滞納しているといってね。（中男→中男）

以上の7～10の文例では，「～ソイテ」の先行部に，発言者自身の発話を引用したものは見られない。7～10の文例では，2人称者または3人称者の発言を引用している。これは，「～テテ」が，発言者自身の発話も引用することができたことと，大きく異なる点である。つまり，「～ソイテ」は，発言者自身の発話を引用することができにくいという規則をもつのである。ここに，「～テテ」と「～ソイテ」との明らかな相違が見出された。

また，「～ソイテ」は，「～テテ」に比べて，文末に立つことが多い。「～テテ」の方が，文中での引用に立つ割合が多いのである。「～テテ」が，前件を後件へと引き継ぐ機能を旨とするのであれば，「～ソイテ」は後件を予定しないで，前件のみで，決着し終えることを旨としたものであると言える。

またこれは，両者の転成関係とも関係があろう。「～ソイテ」は，「そう言って」のつづまった形であることは，容易に判断できる。「～テテ」は「と言って」である。したがって，「～テテ」と「～ソイテ」

の間の相違は，「～ソイテ」の方に，指示代名詞の「それ」が添加している点である。ただそれだけのことなのに，運用上で，それは種々の趣きを醸し出しているのである。

すなわち，「～ソイテ」には，「～テテ」に見られないところの“第三者的視点”があるのであろう。直接的すぎる発言者の発話は，「～ソイテ」で引用することが不自然なのである。少し余裕を置き，距離を置く発言に，「～ソイテ」が有効だということになる。先の7～10の文例では，文例2，4～6と同様に，2，3人称者の発話の引用である。しかし，7～10は，幾分“物語り的”と形容してみたいものとなっているのである。いわば，7～10は，舞台の上で起きた現場を，講師が，聴衆に講釈しているようすが，わかり易かろうか。

したがって，先に，「～テテ」を単純な引用発話と見て，「～ソイテ」を解説発話と仮定したのだが，以上の文例の検討によって，この事実が明らかになったとしてよかろう。

## 三．後続形式の検討

「～テテ」や「～ソイテ」に後続する表現形式を，動詞の種類について検討することは，引用話法を考える上で，きわめて重要だと思う。

三上章氏1972は，「ト」に続く動詞を三種類に分類し，次のようにまとめている。

ト言フ－話し言葉を受ける
ト思フ－思い言葉を受ける
ト称スル－名詞を受ける

爾来，この三種類の動詞を，引用動詞と言うようである。勿論，当該方言においても，「～ト▒」の「ト」に続く▒には，「言う，思う，称する」に相当する動詞が見られる。文例の若干をあげれば，次の通りである。

11○ンナ　アナ　ボーズニ　ヒッパラシタリャ　エート　コー　ユーダゲナ　ワ。そんなものは，坊主に(帽を)引っぱらせてやればいいと，こういうのだそうだよ。(老男→老男)

12○ボンマデニ　キラート　モヤー　ハヨ　ツクラナイカン。盆までに着ろうと思えば，早く作らなくてはいけない。(初老女→中男)

13○コナダト。コナ。コナ。粉薬だということだよ。粉。粉。(少男→中女)

これらの「～ト▒」における動詞では，引用動詞のうち，「言う」と「思う」が圧倒的に多く，「称する」は見られなかった。その代わりに，引用動詞以外の一般動詞で，「見る，見える，もらう，聞く，その他」など，種々のものがある。

「～テテ」と「～ソイテ」が，どんな引用動詞を取るかは，次の通りであった。

「～テテ　▒」＝言う，そう言う，上げる，笑う，見ている，もらう
「～ソイテ　▒」＝言う

「～テテ」や「～ソイテ」に続く引用動詞に多様性が見られない。これらの引用動詞は，「～テテ」や「～ソイテ」の後に，十分な役割をになっていないためであろう。その証拠に，「～テテ」や「～ソイテ」の後に，特定の引用動詞を承接せずに文を終止させてしまう例が少なくないのである。そのことは，引用動詞の存在の必然性が薄いことを示している。

言ってみれば，「～テテ」や「～ソイテ」があると，それは引用話法のめじるしだから，「かくかくしかじかでした」と述べ終わり，昔話の結末がちょうど，「トン，パラリ」などと打ち止めになるように，引用終止の指標とでも見なされるようになってきているのではないだろうか。それは，次の例に見る通りである。

14○イチマイノ　タンボオ　カワスト　オモッタトテ　イチダイ　ナカナカ　ヨー　カイコナシデ　キタテテ。一枚の田を買おうと思ったとしても，一代，なかなか買うことができずに来てしまったと言って。(初老女→老女)

15○ソーダ。ソコニ　ナンカ　イケテ　アルソイテナン。そうだ。そこに何かが生けてある，と言ってね。(老男→青男)

「～テテ」や「～ソイテ」に後続するのは，せいぜい文末詞である。ということは，「～テテ」や「～ソイテ」の後に必ずしも，いつも伸展や展開が義務づけられていないということである。

以上をまとめれば，「～テテ」や「～ソイテ」のあとに引用動詞の承接することがあったが，それは必ずしも義務的ではなく，「言う」類の非多様な引用動詞が，偶然的に付加するだけであった。多くは，「～テテ」や「～ソイテ」が文末に来て，そのまま文終止に至るか，あるいは文末詞を承接して文終止に及ぶことになる。これは，「～テテ」や「～ソイテ」が，すでに，『引用話法』の大役を果たして，そこに在ることを誇示するしるしとして，特徴づけられているものなのだ，と考えられよう。言ってみれば，泳いでいる人が沖の旗印の所まで来たら，ひきかえすとする。その沖の旗印のようなものが，「引用」の話法では「～テテ」，「～ソイテ」でまとめられ提示されるものなのだ，という慣用化が進行すれば，自然に用法の定形化が生まれるのは当然である。

こうして，「～テテ」「～ソイテ」があれば，そこで文を終止させ，引用話法の提示がなされる，という習慣を生んでいるのであろう。

## 四．「～テテ」と「～ソイテ」の周辺

互換性を保ちつつ，しかし互いに相違の認められる「～テテ」と「～ソイテ」について，一文中での諸特徴を明らかにした。

次に，これらの周辺の言語形式にどのようなものがあり，それらが引用話法の運用世界の中で，どのような位置にあるかを考えてみたい。

「～テテ」に近似な「～テユー」がある。

16○ホンソーシャ　ダレダン。ソンナ　ハッピャクエンデモ　ヤルテユー。 奔走者は誰なの？そんなに，八百円でも会をするという。（中女→青男）

前後二文を倒置させて一文にすれば，はるかに分かりやすいものとなる。「～テユー」には，引用話法というのよりは，係りや提題の話法に近い意味があり，「～テテ」や「～ソイテ」とは異なる。

17○クワンダ　テヤ。 食べないってば。（初老女→同）

18○ハヨ　イキャー　テ。 早く行きなさいってば。（中女→少男）

上記の「～テヤ」「～テ」は，確かに引用の話法に由来するものの，もはや文末詞としての固定的な働きと位置とが認められるものである。すなわち，念押しの強調が，主要な意味であろう。また，じれったさも醸し出されることがある。ここには，「～ソイテ」の内包されていた冷静さ，客観性，第三者視点というものとはずいぶん離れた強要さ，おしつけがましさというような意味あいが見られる。「～テテ」の極端な文末固定化による，意味の特立が生じたのであろう。

そこで，「～テテ」と「～テユー」と「～テヤ」「～テ」について，それらの関係をまとめれば，次のようになろうか。

| （係り，提題） | （引用） | （念押し，強調） |
|---|---|---|
| ～テユー ← | ～テテ | → ～テヤ，～テ |
| 〈主部・提題部〉 | 〈文中部〉 | 〈文末部〉 |

次に，「～ソイテ」の周辺に関して，近似な言語形式を挙げれば，「～ソテ」と「～ソ」の二つが認められる。

19○ドモコモ　ナランデ　ドモ　ナランデソテ　オーキナ　コエデ　タケッタゲナ　ワ。 どうにもこうにもならないので，どうにもならないからと言って，大きな声で，怒ったそうだよ。（老女→中女）

20○イマ　ソー　コト　ソ。 今，うわさしている通りさ。（老女→中女）

先に「～ソイテ」が文末部に偏在しがちとなっていることを指摘し，引用話法としての指標の意味が強くなっているからであろうと推定した。ところが，上例19では，第三者の発言を引用し，直接話法で文中に「～ソテ」を認め得る。「ソイテ」と「ソテ」とは近い発音の類似が見られるのに，「ソテ」が文中での安定を保つのに対し，「ソイテ」は文中では不安定となって，文末部で安定しようとしているのである。したがって，「ソテ」にはまだ引用話法としての本来の「引用」機能が厳然と存するのに対して，「ソイテ」には，それが希薄となり，「引用」の象徴的機能が著しくなったと考えることができるのである。この差が，文中に止まる「ソテ」と文末部への移行を方向づける「ソイテ」との差として見出すことができるようである。

ところでもう一つ，「～ソ」について考えよう。これは，係助詞の「ぞ」である可能性もある。また，係助詞の「こそ」に由来するものかもしれない。「ぞ」や「こそ」に由来する「ソ」であれば，引用話法の考察からは無縁であり，言及をひかえなければなるまい。ただし，この「ソ」には，「～ソイテ」における解説発話のニュアンスを多分に含意しているので，すぐにも除外してしまえないのである。上例20の文では，文末の「ソ」が，それの上接部「イマ　ソー　コト下」での弁明の叙述を受け止めているところを見ると，「～ソイテ」との縁を切ってしまいがたいからであろう。「ソ」の例は，きわめて少ないために，実証が困難である。

ともかくも，「～ソイテ」の周辺にある「～ソテ」と「～ソ」に関しては，次の

| | （引用） | （引用の象徴的指標） |
|---|---|---|
| φ → | ～ソテ → | ～ソイテ |
| | （訴え） | |
| | → | ～ソ |
| 〈文頭〉 | 〈文中〉 | 〈文末〉 |

のように，まとめられよう。

## 五．方言会話における「～テテ」（引用発話）と「～ソイテ」（解説発話）との相違

次に，「～テテ」と「～ソイテ」が，対話という会話の中で，どのようにコミュニケーション上での意味作用の差を生じているかについて，考えてみなくてはならない。

私は以前から方言会話の研究に関心を抱いていた。世の中では，一般に談話研究という言い方で，発話行為の規則化がなされているようである。私は談話とい

う名辞を使わず，会話というのを使っている。

かつて私は文集合に興味をもった時期がある。江端1983d「方言修辞学に向けて」や江端1984c「会話方言学考」によって，方言会話研究の枠組みと可能性とを表明したことがある。尤も，それ以前にJ. L. オースチン1978に，言語行為の論がある。私も，1985e「修辞方言学新考」で，より具体的に方言会話の分析の枠組みを討究したことがある。それから7年間，私は方言会話についての考察に自己醗酵を待った。この7年間に，J. R. サール1986が翻訳され，また，ジェフリー，N，リーチ1986，1987が翻訳，紹介された。こうして，方言会話研究または談話研究は，もう一方で，語用論という花園を招来してきたようである。

そこで，私は，私なりのやり方と目的に基づいて，方言会話の中における「～テテ」「～ソイテ」の状況を観察してみたいと思う。

《会話甲》〔話し手aは80歳男，bは84歳男。場所はbの家の座敷。私とa，bの三人。1965年8月収録。〕

21 a○（政治や社会は）ハシル　コトバッカ　ヤットルダ　ゼ。ソンダモンダデ　ジコガ　オオイワ。アン。促進することばかり，やっているよ。だから事故が多いよ。うん。

22 b○ムカシャ　ノー。ゼンコージエ　イクテテ　ノー。昔はねえ。長野県の善光寺へお参りに行くといえばねえ。

23 a○ゼンコージワ　ムカシャ　ジューゴンチ　カカラニャ　イケレナンダダ　ゼ。善光寺へは，昔は，15日かからなくては，行かれなかったんだよ。

24 b○オレガ　カジヤエ　イクヨニ　ナッテ　ノー。ナヌカワ　カカラナ　イケナンダ　ワ。ゼンコージー。イキニャー　ナヌカデ　ケッキョク　ジューゴンチダ　ゼ。

俺が鍛冶屋へ行くようになってね。7日はかからなくては，行けなかったよ。善光寺へ。往きには7日で，結局15日かかるんだよ。

上の例によれば，「～テテ」は，22bの発話でわかるように「ゼンコージエ　イクテテ　ノー。」の共通語訳は，「長野県の善光寺へお参りに行くといえばねえ。」である。「イクテテ」では「行く」と断定した内容を承接しているのではなくて，中身としては，「行くというときには」の意なのである。譲歩気味の話題の切り出しが，ここに見られ，その時に「～テテ」が用いられている。話題としては，21aで，現代社会が車などによるスピード化に向かうのを批判する。昔の生活をなつかしみ，のんびりと徒歩で7日もかかって，長野県の善光寺へ参詣に行く話へと転じていくのである。その時に，「～テテ」が見える。そういう場面で，用いられるものであるというのが興味深い。

したがって，会話甲における「～テテ」に，次の原理を見出すことができよう。

①～テテ＝始発性

②～テテ＝無前提性（①の裏返しの言い方）

すなわち，①の始発性とは，新しく話題を持ち出すときに用いられたことを，このように性格づけたものである。

また②無前提性とは，21aの発話で，事故が多い車社会への批判が出されたのをうけて22bにおいて，全く車社会とは異なった人力社会に題材をとった話題に入っていったようなのを，性格づけたものである。車社会の話が前提となって，昔の人力社会の話題が引き出されたと考えれば，無前提とは言えないわけである。しかし，かなりにかけ離れた話題が，前の文とはすぐにつながらないかの如くにうち出されたり，引用されたりする。それが，いかにも架空の提示めいているので，あたかも，前提なしでその話題が提示されたような新鮮さを見せることがある。上の例での「～テテ」は，それの好例と言ってよいのである。

もう一つ，「～テテ」の性格を会話甲に基づいて規定するとすれば，

③～テテ＝共有例題性

というものであろう。会話甲における話者a，bは，居住地から数百kmも離れた善光寺へ参詣するのを楽しみにしていたのである。往復15日も徒歩で出かけてでも，現世利益，衆生救済を求めて，この世の極楽にあずかりたいものだとの一念で，旅に発ったのである。民間人の旅の楽しみというものが，村社会での共通の話題の中に生きているのである。それは，ちょうど，伊勢参りや熱田神宮参り，あるいは四国八十八ケ寺参詣などにも通じる行脚なのである。このような遊歴は，生活者に共有される話題であり，心の湧きたつテーマのはずである。上の会話で，「～テテ」によって，善光寺参詣の話題がうち出されて，話がはずんだのには，それとしての必然性があったのである。「～テテ」には，「～ソイテ」のもつ取り立て性はなく，ごく自然に，生活者間共有物の引用という機能が，運用上から，帰納される。

次に，もう一つの会話をとりあげて，「～テテ」の用法について考えてみたい。

《会話乙》〔話し手は，cが54歳女，dが75歳女。cの家の縁側での会話。dがcを訪問。1965年。cとdとは近所の親しい間柄。〕

25 c○コトシャー　ハマダノ　クサ　カッテ　ナン。タイゲニ　ナッタモノデ　カリコナシデ　タンボノ　ナカオ　ハンブバカ　コーニ　アリタダケド　イコ　ヒエモ　アラシンサニ。マー　ワ

シャー　アレデ　ヨシダ　ソー　モットルダ。スンダ　ワヤ　ソイトルダ　ガン。今年は，浜田地区の田の草を刈ってね。心労になったので，刈らずに，田の中を半分ばかり，このように歩いたのだけれど，あまり稗もないから。もう私は，あれで結構だとそう思っているんだ。済んだよと言っているんだよ。

26d○ヤッパリ　アーユー　フユワ　ヨー　フッタヤツワ　エーケドモ。オミヤン　トコ　ヤットル　トキニ　ミンナガ　ヨルダテヤラテテ　ケッコニ　アンダ　ガナー。やはり，あのように，冬はよく除草剤を播いた田は草をとらなくてもいいけれど。お宮（神社）の所の田で仕事している時に，皆が，寄り合いで，集合するんだとかといっているうちに，しらずしらず，なんですよ。

27c○ホー。ハエトル　カナ。ほう。（除草剤を播かなかった所に，草が）生えていますか。

28d○ヨー　ハエテ　イッペン　トッテ　ナン。よく生えて，だから，一度田の草を取ってねえ。

上の会話乙では，cとdとが田の草取りについて話し合っている。話者cは，田の草を，あまり熱心には取らない。しかし，話者dは，冬の間に除草剤を田に播き，更に草取りにも熱心である。26dの発話中に，その草取りは，村の寄り合いが召集されたために，機会をのがし，予定通りにできず，そのために，草が繁茂したと述べられている。突然に入ってきた寄り合いに対する迷惑の感情が，「ヨルダテヤラテテ」の中の，「～テヤラ」に含まれているようである。したがって，その思いがけない迷惑の感情を受けて，「～テテ」と承接するもの言いには，大きな圧力の前には，なすべくもなく従うのだという受容の姿勢が込められるのである。すなわち，これを一つの傾向と見ると，

④～テテ＝受容性，自然受諾性

とでも言いたい力を，読みとることができるのである。つまり，内発する抵抗力によるものではなくて，外圧を素直に承けとめて，「～テテ」で言い表す誠意というものを，ここに認めたいのである。引用話法上，「～ソイテ」の自覚性とは異なった受容性というものが，表明されていると言ってよい。

次に，「～ソイテ」について，会話の中での運用状態を観察してみたい。

《会話丙》〔話者eは45歳女，fは22歳男。話者eの家での会話。1965年。〕

29e○ソーダ　ナン。センモン　センモンデ　イロイロ　カ。アイダ　ワナン。そうだね。専門ごとに，いろいろ異なっているんだね。あれだよね（なんですね）。

30f○トヨチャニ　ナニー　ナルダ　スタラ　マンダワカランソイテ。豊明君に，将来，何になる（どんな職業につく）のかと尋ねたら，まだわからないと言ってて。

31e○ナニー　ナルダ　ワッカーヘンデ　コマッチャウ　ガネ。カイシャエ　マー　カイシャガ　エー　ナー　ソー　ヤー　カイシャミタイナ　モンワ　ソイトル　モン。

何になる（どんな職業につく）のかわからないので，困ってしまうわ。私が息子に，会社へ行くこと，もう会社員になることがいいね，と説けば，息子は会社みたいなものはいやだと，そう言っているんだもの，困ってしまうわ。

上の会話丙では，話者e とf とが，大学生であるeの息子の豊明について，将来の仕事を何にするか互いに深切に話し合っている場面である。30fにおいて，「ワカランソイテ」のように，「ソイテ」で文が終止しているのには「～テテ」とは異なり，客観的にとりたてた，という意識が強くうち出される表現効果がある。それを，次のことばで形容することができよう。

⑤～ソイテ＝とりたて性，強調性，積極性

これは，引用したことがら，つまり，「～ソイテ」で承けとめる先行部分の内容を，冷静に判断しないで，そのままに引用するということである。しかし，そこには，「～テテ」のような直接的な感情付与というものはなくて，少し距離を置いて，かくかくしかじかの問題があるのですよ，と提示している姿勢が見える。

したがって，「ワカランソイテ」の共通語訳を，会話丙のように，「わからないと言ってて」としたのは，「わからないって」とするほどには，「ソイテ」が無意味になっていないことを表したかったからである。仮に，「ワカランテテ」とあれば，その共通語訳は，「わからないって」でも良かったであろう。しかし，「ワカランソイテ」とあるので，「わからないって」と訳すことに，ためらいがあったと考えてよい。とりたて性，強調性，積極性がはたらいていて，単純な文末訴えかけ性としての文末詞とは解しえなかったということであろう。引用作用をになう文末詞だと言ってしまってもいいはずである。いずれにしても，今は，会話次元での考察であるから，それについての論議はさておくとして，⑤と類似のことだが，

⑥～ソイテ＝かしこまり，律義さ

という効果が表明されていることを，指摘しておきたい。

さて，もう一つ別の場面における「～ソイテ」の会話例を見てみたい。

《会話丁》〔gは45歳女，hは28歳女。1965年。〕

32g○ナンダ　シャン。アノー　ドコヤラ　イットッタ　ヨ。何かしら。あのう，どこかへ行っていたよ。

33h○ダレガー。誰が？

34 g ○アノー　イチバン　シタノ　コ。コーコーエ　イッタ　トコダ。アノー　マンダ　フツーノ　ミンナガ　イク　トコエ　イキタイソイテ　ナン。ソイデ　アイダ。あのう，一番年下の子。高校へ行ったばかりだ。あのう，まだ，普通の皆が行く所へ通学したいといってね。それで，なんですよ。

35 h ○ナニー。コートーガッコー　ソツギョーシテカラ　ヤ。なんだって！高等学校を卒業してからなの？

36 g ○シテカラ　ナン。前の高校を卒業してからねえ。

この会話丁では，話題の子どもが，ある高校を卒業したあとで，普通の子供の通う普通の高校へもう一度入学して，人並みであることを求めた青少年の逸話が深刻にとりあげられている。34gの発話において，「ミンナガ　イク　トコエ　イキタイソイテ　ナン」という中核的な引用発話が注目される。目立つこととか，特定的であることではなくて，人並みであり，皆と同じであることをこの子は求めている。何らかのハンディキャップを負って，しかるべき高校に入り，所定の学業を終えた子供が，その間に抱いていた劣等感を克服するために，普通の高校へ受験し直したわけである。コンプレックスの解消を生き甲斐とした一青少年の実話には，引用する人に若干の驚きと感慨が，伴わないはずもない。34gでのもの言いでは，「イキタイソイテ」となっていて，「イキタイテテ」にはなっていない点が注目される。これは，先の⑤でとりたて性などを導き出したところを確認することができる。と同時に，

⑦～ソイテ＝意外性，興奮，感興

というような精神の高ぶりが，こめられていると見てよいのである。

なぜ34gが，⑥のような意味になり，⑤のようではないのか，と問われたならば，34gの発話での「～ソイテ」には，勿論⑤のような意味を含みつつも，さらに，⑥のような意味も含意することになっているのだと説明しなくてはならない。そこには，会話の流れというものがあって，単一文ではとうてい担うことのなかった全体的含意というものが，そうさせるのである。つまり，会話丁では，意外ともいえる子供の逆境克服譚を展開することが，話題の中心であったために，必然的に「～ソイテ」の引用話法には，それの意味が言語形式に対応するものとなったのである。しかし，あくまでもこれは文脈的意味というものであって，常に，「～ソイテ」が意外性をもつのだとは言いえないことは特記しておかなくてはならない。会話における意味は，臨時的な意味，あるいは傾向的意味なのであって，文脈から独立した形象的意味と同一視しにくいと言うべきである。

次に，「～テテ」と「～ソイテ」との複合形である「～テテソイテ」の見られる会話例を見てみたい。複合形の場合には，後部形態素の方に，主体があるものである。したがって，この「～テテソイテ」についても，「ソイテ」の一種として考えていくことができる。

《会話戊》〔話者iは80歳男，jは84歳男。1965年〕

37 i ○タイガイ　アツメテ　モッテキャガッタ　ダ。大概，鍬の注文を集めて岡崎へ持って行きやがったんだ。

38 j ○アー。アツメテ　ノー。ホイデ　ヤッテ　クルダゲナ。オランタチガ　オラン　トキニャ　ドー　セルダテテソイテ　ヤッタガ　ナー。うん。鍬を集めてね。それで，鍛冶屋をやってくるのだそうだ。しかし俺たちがいない時には，それをどうするのか，と言ってやったんだがねえ。

この場合の「～テテソイテ」には，言いとがめたり，理由を正したり，詰問したりする気分がこめらている。したがって，この「テテソイテ」のもつ意味特徴を，会話の中から導き出すとすれば，

⑧～（テテ）ソイテ＝詰問，事実確認，念押し

のようなはたらきを指摘することができるようである。これが帰納された背後には，会話戊に登場する話者i，jは，ともに話題中の第三者の言動に好意をもっていなくて，常に，彼に悪態をついている。iとjの発言には，話題中の第三者に罵詈語のかぎりを尽くして待応している。こういった場面での引用話法であり，しかも自分自身の発話を引用して，第三者に説得した場面である。激しい感情を「～テテ」でうけとめつつ，客観視した形のメタ言語形式「～ソイテ」で複合させて，「～テテソイテ」をうまく醸成しているわけである。なるほど，巧みなことばづくりである。こうして，⑧のような，詰問，事実確認という意味が読解し得ることになったのである。

ここで一つ注目しておきたいのは，「～テテソイテ」の卑俗さである。たいていの複合語のばあい，ていねいさが増すことが多い。しかし，この場合，「～テテ」や「～ソイテ」が単独で使用された時の方が，「～テテソイテ」となって使用された場合よりも，より上品であるということである。つまり，「～テテソイテ」には，あつかましさや威圧感や，おしつけがましさという余情が付帯しているのである。

以上で，方言会話における「～テテ」と「～ソイテ」のコミュニケーション作用の分析を終える。

## 六．結　　論

これまでの考察の全体を総括して，明らかになった点を，以下に，箇条書きの形で表してみたい。

(1) 全体として

「～テテ」は，引用発話を醸成する。

「～ソイテ」は，解説発話を醸成する。

(2) 承前言語形式の人称の傾向

| | 承前言語形式の発話主体 |
|---|---|
| ～テテ | 1，2，3人称 |
| ～ソイテ | 2，3人称 |

(3) 「～テテ」と「～ソイテ」の後続形式の特色

双方が文末部で引用終止の指標と見なされる傾向が生じている。「～テテ」と「～ソイテ」に続く動詞は，形式化した「言う」などの動詞に限られ，あるいは文末詞化している。

(4) 「～テテ」と「～ソイテ」の周辺

「～テテ」には，「～テユー」・「～テヤ」・「～テ」があり，「～ソイテ」には，「～ソテ」・「～ソ」がある。

(5) 方言会話における「～テテ」と「～ソイテ」

〈～テテ〉について

① 始発性

② 無前提性

③ 共有例題性

④ 受容性，自然受諾性

〈～ソイテ〉について

① とりたて性，強調性，積極性

② かしこまり，律義さ

③ 意外性，興奮，感興

④ 詰問，事実確認，念押し

注釈を記す。(1)～(4)が文表現次元とし，(5)を方言会話次元と見て，異次元の二元的な考察をとり行ったつもりである。したがって，(5)には，「～性」などという含みのある言い方を持ってきたのは，(1)～(4)との区別を考えてのことである。(1)～(4)では，文法用語を用いて，構文論的にも考えることなどもあり得た。しかし，(5)では，もっと包括的にと考えて論じた。ところが，(5)の会話の分析では，十分に論理の筋道を通した結果には至りえていない。分析の理論化では，方言会話について，更にいっそうの検討を必要とする。

ひとまず，一地方言について，「～テテ」と「～ソイテ」という対をなす引用話法を，とりたてて参考にする先行文献もなしに，思いのままに，以上のように分析してみた。こういう分析法が，会話の研究に有効に展開してゆくことを願っている。この試論を基にして，方言会話の分析的研究が，いっそう実りあるものとして実践されることを希望しているものである。

## 参考文献


1）Austin, J. L. 1962，坂本百大訳1978 『言語と行為』大修館書店

2）国立国語研究所 1960 『話しことばの研究(1)』国研報告18 秀英出版

3）南不二男 1972a 「日常会話の構造－とくにその単位について－」（『言語』Vol. 1，№2）

4）南不二男 1987b 「談話行動論」（『談話行動の諸相』三省堂）

5）中田智子 1990a 「発話の特徴記述について－単位としてのmoveと分析の観点－」（『日本語学』9－11）

6）中田智子 1991b 「談話分析の観点－多角的特徴記述のために－」（『研究報告集』12，秀英出版）

7）山梨正明 1986 『新英文法選書12 発話行為』大修館書店

8）杉戸清樹 1983a 「待遇表現としての言語行動－『注釈』という視点－」（『日本語学』2－7）

9）杉戸清樹 1989b 「言語行動についてのきまりことば」（『日本語学』8－2）

10）西原鈴子 1990a 「話者の前提－『やはり(やっぱり)』の場合－」（『日本語学』9－6）

11）西原鈴子 1991b 「会話のturn-takingにおける日常的推論」（『日本語学』10－10）

12）佐伯 胖 1982 『推論と理解』〈認知心理学講座3〉東京大学出版会

13）福池 肇 1985 『談話の構造』〈新英文法選書10〉大修館書店

14）J. R. サール，坂本百大他訳 1986 『言語行為－言語哲学への試論－』勁草書房

15）ジェフリー．N. リーチ，池上嘉彦他訳，1987 『語用論』紀伊国屋書店

16）G. N. リーチ，内田種臣他訳，1986 『意味論と語用論の現在』理想社

17）水谷 修 1991 「会話研究の新開拓」（『日本語学』10－10）

18）甲斐雄一郎 1991 「国語教育の会話研究」（『日本語学』10－10）

19）日比谷潤子 1991 「〈ハリデーの言語学〉社会言語学からみたハリデー」（『言語』20－4）

20）茂呂雄二 1991 「教室談話の構造」（『日本語学』10－10）

21）三原健一 1991 「『視点の原理』と従属節時制」（『日本語学』10－3）

22）廣瀬幸生 1988 「言語表現のレベルと話法」（『日本語学』7－9）

23）砂川有里子 1988 「引用文における場の二重性につ

いて」（『日本語学』7－9）
24) 藤田保幸　1988　「『引用』論の視界」（『日本語学』7－9）
25) オリビエ・ビルマン　1988　「間接話法の日仏比較対照－文中の会話文＋『と』を中心として－」『日本語学』7－9）
26) 鎌田　修　1988　「日本語の伝達表現」（『日本語学』7－9）
27) 藤原与一　1955a　「方言文章論試作－連文の類型－」（『国語学』20，国語学会）
28) 藤原与一　1977b　「方言会話の研究」（『方言学の方法』大修館書店）
29) 三上　章　1972　「間接引用」（『現代語法序説』くろしお出版）
30) 奥津敬一郎　1974　「引用文の『ト』」（『生成日本文法論』大修館書店）
31) 久野　暲　1973　「時を表わす『ト』」（『日本文法研究』大修館書店）
32) 江端義夫　1966a　『連文表現法の研究』（未）
33) 江端義夫　1972b　「連文表現について」（広島方言研究所第一回方言研究ゼミナール発表資料）
34) 江端義夫　1984c　「会話方言学考－福山市春日町吉田の方言会話について」（『広島民俗論集』渓水社）
35) 江端義夫　1983d　「方言修辞学に向けて（その2）－沈黙表現の習俗的記号性－」（『方言研究年報』28）